

## 保育者ワークショップ

## 「かたち」発見

仁愛女子短期大学 教授 重 村 幹 夫

## 1. はじめに

私は、様々な場で造形教育、造形活動を行って、絵画を描いてもらったり、私の絵画を鑑賞してもらったりしてきました。そのような場で、私は、多くの人が、「何を描こうか」、「何が描いてあるのか」といった具体的なイメージを前提に、絵画を描き始めたり、絵画を鑑賞したりすることを見てきました。その経験から、一般に、多くの人は、絵画表現や絵画鑑賞の時に、その絵画の意味にとらわれ過ぎているのではないかと考えています。また、若者の中には、アニメや漫画に出て来るようなキャラクターや、いわゆる「ゆるキャラ」といったものに、強い興味を示す者もいます。自由に絵を描かせると、このようなキャラクターを描こうとするのです。私は、キャラクターは造形というよりは記号であると考えます。キャラクターに興味がある人は、「○○」といったキャラクターの名前とイメージ、すなわち記号に反応します。そこには表現や鑑賞といった造形の関わりがないことはないでしょうが、極めて限定的にならざるを得ないと考えています。このような、表現の意味、記号へのこだわりは造形にとって否定されるものではありません。しかし、絵画表現や絵画鑑賞の上で、意味や記号だけでは、表現の多様性を表現、受容することは不可能ではないでしょうか。

幼児の造形表現に日々向き合う保育者にとっても、このような、多様な造形の表現能力、受容能力は、大変重要なことであると考えます。

## 2. 開催日及び受講者数

日 時／平成25年10月5日（土） 13:30～15:00

受講者数／4

## 3. ワークショップの内容

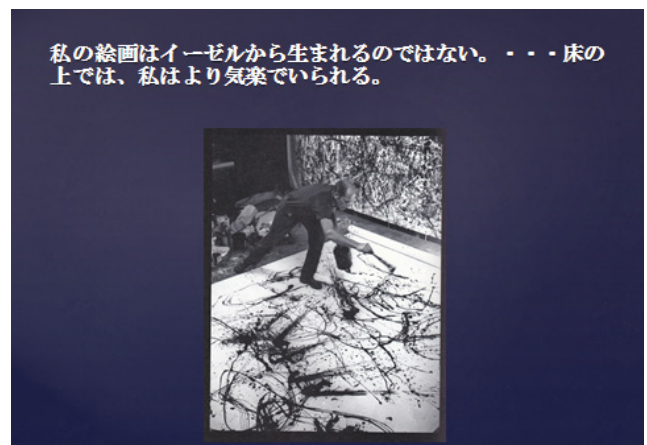
このワークショップでは、最初に、パワーポイントを見て

もらいました。この中で、具象絵画と抽象絵画を見比べてもらい、どちらが好きか答えてもらいました。



受講者は、全員予想通り、具象絵画の方が好きだと答えていました。その理由を尋ねると「何が描いてあるかはつきりわかるから」との答えでした。他の作品も、同様に見比べてもらいましたが、答えは同じでした。

次に、20世紀アメリカの抽象絵画の画家Jackson Pollockの言葉を引用して、彼の制作方法を説明しました。



Pollockの作品は、床に置いたキャンバスの中に画家自らが入って、塗料を垂らしながら描かれます。その制作過

●描きたいイメージ、テーマ→描画行為（意識）、完成

↓↑

●描画行為（無意識）→描きたいイメージ、テーマ、完成

無意識的な行為を通じてイメージを探り、  
テーマを見つける

一般的に絵画制作は、描きたいイメージ、テーマがあって、意識的に描画行為を行い、完成に至ります。それに對し、Pollockの作品は、無意識的な描画行為が初めにあり、描画行為を通じてイメージやテーマを探り、完成に至ります。それは、多分に偶然的なものです、出来上がった作品は必然性を帯びてくるのです。

このワークショップでは、Pollockの描画過程を参考にしながら、抽象絵画を作り上げてもらうことにしました。そのため、受講者に、まず、色画用紙を無意識に近い状態で自由に切り取りながら面白い「かたち」を見つけてもらいました。そしてそれを組み合わせて画用紙に貼り付け、絵画を作ってもらいました。最後に、このような無意識的な行為を通じて出来上がった作品にテーマをつけてもら

いました。テーマには擬音語を選んでもらいました。擬音語とは、メーメー（羊の鳴き声）、ブーブー（豚の鳴き声・ブーイング）、ドキドキ（心臓の鼓動）、ガチャン（ガラスの割れる音）、ドカン（爆発音、衝撃音）などです。



### 3. おわりに

アンケートの結果は、概ね好評でしたが、受講者が4名と少ないのが残念でした。このようなワークショップを増やしてほしいとの意見もありました。今後のワークショップとしては、保育現場の実践にすぐ役に立つもの、すぐには役に立たないように思えても、造形教育として必要なもの、それぞれをうまく組み合わせることが望ましいと考えています。